

---

# フェイクヒーローズ・オンライン

上屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フェイクヒーローズ・オンライン

### 【Nコード】

N2106Z

### 【作者名】

上屋

### 【あらすじ】

あらゆる特撮ヒーローを再現できるVRMMO、「ヒーロー&ヒールVSオンライン」、主人公、木島はかつて失った夢を埋め合わせるようにゲームに埋没していた。

レアスキルとされる「正義」も、ただ宝の持ち腐れとする日々。

しかし、ゲーム内で開催される対人戦イベントの賞金に釣られた木島は、数千人を巻き込むデスゲームへと挑むことになる。

そこは偽りのヒーロー達の楽園。

ヒーローにはなれず、それゆえに彼らは偽りを楽しむ。  
しかし男は、「正義」を背負い、真のヒーローとなるために戦いを  
始める。

## 第一話「ステーキ」1（前書き）

「変身！」

（仮面ライダーシリーズより／全ての仮面ライダー）

## 第一話、「ステーキ」1

風が、凪ぎ、ぬかるむ。

闇の底で闘争が幕を開けた。都市の熱風をかき分け、異形が動く。

ヴァ　ア　ア　ウ　オ　オ　オ　……　ツッ！

唸り、咆哮。筋肉が膨れ上がり、血管が生々しく這いずる腕、鉄槍の如く尖った五指の爪が薙ぐ。

黒い影が跳びすさった直後、背後の薄汚れたビル壁が切り裂かれ、崩壊。

薄暗闇の路地裏、照らされるは異形の肉体。大きく発達した両の腕、対応するヒッティングマッスルが搭載された肥大する背中からは湯気が上がる。そして、両端から牙の飛び出たイノシシを想起させる顔面。

しかし、異形の野獣の両眼には、人の魂の光をたたえていた。それは、人の形をした獣<sup>イノシシ</sup>だった。

「セイツッ！」

野獣に対峙するは、黒の人影。牽制のジャブから、右ロー、顎を穿つ左ストレートの流れるような連撃。

「ゴゴッ！」

鈍く唸り、野獣が後退。太く逞しいその肉体に、人影の攻撃は確実にダメージを与えている。

漆黒の空、不意に厚き雲の狭間から月の光が刺した。人影が、都

市の裏側よりその真の姿を表す。

暗黒の装甲、表面に走る血管の如き朱のライン。

輝く純白の巨大なマフラーが、風の澱む路地裏でたなびく。

そして、頭部をヘルメット状に覆う仮面には、昆虫を思わせる複眼パターンの二対のゴーグル、二対のアンテナ。

まるでドクロのようにも見えるデザインは、肉を削ぎ落とした人間の本质を突きつける鋭い酷薄さを持っていた。

黒の魔人が、都市の闇の中で野獣と相対する。

「ダア、ダアレダア、ギザマアツツ！」

吠え声と共に人成らざる声で野獣が問う。

「……俺か？ 俺はなあ」

答えより速く、野獣が距離を詰めた。巨大な肉塊が、コンクリートを踏み割り疾駆。ドクロの魔人へ、牙を鳴らし喰らいつく。

『dead end mode set ready!』

朱の光を放つ、ベルトのバックル。そこから響く無機質な声。

ベルトから伝わる破壊の光が、右足へ向かう。収束した赤光が煌々（こうこう）と輝いた。

足を広げ体を開く、姿勢を落とし構える。

野獣の突進、その重撃にカウンターの照準を合わせ、攻撃本能を解き放った。

「ツツ鋭！」

魔人の体がコンパスのように真横に回転、軸足の裏から煙が上が

る。

轟速の右回し蹴り、シャープな軌道で吸い込まれるように野獣の左胴へ。

『 ignition!! 』

バックルが咆哮、同時に右足の光が炸裂。

ゴッ！！

路地裏で爆音と閃光が乱舞。野獣の巨体を派手に吹き飛ばし、ビル壁へと叩きつけた。超重量に壁が陥没、巨体が埋まる。

「……俺の名、か」

野獣を撃破した体勢のまま残心を崩さず、魔人が呟く。

それは、守護する者。それは、闘う者。それは、打ち貫く者。

汝、その名は、

「マスクド 仮面ライダー          ステーク」

闇をまとい、魔人は都市の影へ消えていく。

「いつやああ、どこもありがとっございましたユツキーさん！」

ペコペコと頭を下げながら、マスクドライダーステーク    ユー

ザー名：ヒダ    ナオト    本名：キシマナオマサ 木島直正    は先程蹴り飛ばした野

獣 外装名：エレキック・ボア ユーザー名：ユツキー に近づいていく。

「いやいやオタクもなかなかアクションにキレがあるね！ ヤラレ役冥利に尽きるよ」

ガラガラと瓦礫をかき分け、巨体上がる。野獣はその双眸を木島に向けた。

近づきながら、魔人の体から光が発生、外装が空間へ溶ける。

表れるはTシャツとジーンズのラフな格好。黒髪、黒眼のこれといって特徴のない日本人として標準的な青年。特に大きくイジっていないキャラクターメイクの印。

「やつぱユツキーさんに頼んでよかったですよ、噂通りのヤラレっぷり！」

満面の笑みで野獣を讃える木島。立ち上がる野獣。ユツキーと軽く握手。

「いやいや、ゲーム上とはいえ、一応お金貰ってるからさ、満足してもらえりゃ嬉しいよ。……あ、最後のキック、もつと派手めなやつでも良かったんじゃない？ ポーンと高く飛んでもさあ」

太い右腕を空へ跳ね上げるイノシシ。その仕草を、先程とは打って変わって苦い表情で見つめる木島。

「あー、俺的にはその……地に足つけたアクションのほうが……」  
「あ、あんま派手じゃなくて、泥臭いやつの方が好み？ まあ、その辺はやつぱり人それぞれの趣味だね」



気さくな調子を崩さず、ユツキーが話を続ける。

「CGのド派手な必殺技もいいけど、地道なアクションもスーツアクターの腕が出るから……」

「あ、あのー……」

盛り上がるユツキーに、済まなそうな声をかける木島。

「実は、そろそろ例のイベントが始まるんで、おいとましますね」

「え？ ああ、ヒダさん、例のGM主催イベント行くの？ 僕も行くのかと思ってたけど、これから仕事でさあ、じゃがんばってね！」

獣面を歪ませ、爽やかな笑顔を送るエレキック・ボア。その体が徐々に透けて透明化、虚空に消える。ログアウトのエフェクト。

同時に背景である夜の路地裏も崩壊。0と1の情報の羅列に還るビル、ゴミ箱、アスファルト。

後には殺風景な真っ白い部屋に木島が一人、佇むのみ。

「……派手なヒッサツワザ、俺だってやりたいけどさあ」

白の空間。レンタル制のパーソナルイベントスペースで、木島の己にしか聞こえない呟きが響く。

## 第一話、「ステーキ」2（前書き）

「知ってるかな、夢っていうのは、呪いと同じなんだ。呪いを解くには夢を叶えるしかない。」

けど、途中で夢を挫折した者は、一生呪われたまま……らしい。あなたの罪は、重い。」

（仮面ライダー555より/ホースオルフェノク）

## 第一話、「ステーキ」2

20XX年、発達した新インターフェイス技術は、軍事目的からの更なる洗練と強化を経て、ついに一般の民衆にその恩恵を甘受させた。

身体感覚と操作を直結、タイムラグなく、より直感的にヴァーチャル・リアティー内のアバターを操作できる新インターフェイス技術は、遂にVRMMORPGとして多くの人々に受け入れられていく。

そして乱立していく様々なVRMMORPGは、差別化のための多種多様化した要求に応えるいわゆる「ニッチ」向けの物が増加していく。

そして、青年 木島が選んだゲームは中でも「特撮オタク」向けの方向性を持つ作品だった。

「男として生まれたからには、『ヒーローになりたい』と思わなかったやつはいない」

それが木島の持論だ。

そして、木島はそれに従った。

幼き頃の夢を叶えるため、少年の頃から必死にヒーローになる道を探した。

その中で「真の正義の味方はいない」、「真つ当な正義感だけでは世の中では生きられない」ことを学んだ。

だがそれでも夢を諦めきれず、青年はある施設の門を叩く。

「スーツアクター養成所」そこで彼はいつか子供のころに見たヒーローになるうとした。せめて、あの頃の自分のように、子供に夢を見せる仕事がしたい。ただその一念で。やがて熱意を認められ、入門となる。次々とカリキュラムを受けながら、いつか自分がヒーローになる日を待ち続けた。

だが、その日は来なかった。

俺だって、やってみたいけどさあ。

取り外したベルトのバックル 「変身」のためのアイテムを握り締め、木島は過去を噛み締める。

俺じゃ無理なんだよなあ。

スーツアクターの練習中、木島は同期生との高所からの着地に失敗、左足を粉砕骨折している。

怪我自体は時間はかかったが、完治はした。だが、スーツアクターとして最も必須のものは治らなかった。

共に落ちた同期生は腰椎を損傷、下半身不随となり、木島もまた高所恐怖性になってしまった。

事故の責任その物は木島にはない。だが、スーツアクターの夢を立たれた同期に対しての自責の念を抱えたまま木島は「跳べない男」として、夢を諦める。

スーツアクターを諦めた木島は、サービス開始直後から始めていた「ヒーローアンドヒールVSオンライン」にただひたすらのめり込んだ。失った夢を、埋めようとするように。

両親はすでに他界、身内は叔父夫婦ぐらいしかいない木島にはゲ

ームのみが寄りどころとなる。

実際、ゲーム内はゲーム内通貨とキャラクターレベルさえあればおよそあらゆる「特撮ヒーロー」を再現することが出来た。

その中で木島は「マスキドライダー」を選んだ。初期に選べる「基本ヒーロー」の一種だが、今なお毎年新作が作られるため、非常に人気が高い。なお基本ヒーローには他にもレンジャーなどがあり、レベルが上がれば上位ヒーローの「ギガント」や「スペースDK」などにもなれる。

さらにはゲーム内通貨により、多種多様な必殺技やマシンも購入出来る。キャラクターデザインも、撮影会社の協力で既存のヒーローからオリジナルまでも幅広く選択が出来るのだ。

木島は、子供の頃に考えていたオリジナルライダーにこだわった。ゲーム内でモンスターとして表れる怪人を狩り、必死にアイテムや通貨を稼ぎ続けた。

気がつけばレベル95になっていた。カンストのレベル制限は150である。はつきりいって、同じ時期に初めたプレイヤーの中ではかなり低い。

基本的に経験値は二の次で金ばかり追いつけた結果だが、稼いだ金の大半は購入資金と、ヤラレ役の仕事をする怪人のプレイヤーへの報酬で消えていた。とにかくこの「ステーク」の外装には貢いでいる。

高く跳躍するなど、自分には扱えない必殺技もついつい装備させてしまった。

バイクとか装備とか結構高いんだよなあ、……これ売れないかなあ？

立体ディスプレイで自分の保有スキルを確認。「獲得資金増加レベル3」や「腕力強化レベル4」などの必須や死にスキルがずらずらと並ぶ。視線はその最奥へ。

初期スキル：正義レベル1

レアスキル、らしい。

## 第一話「ステーキ」3（前書き）

「ほほお……いい性能だな キサマの作戦目的とIDは？」  
「正義 仮面ライダー2号」

（仮面ライダースピリッツより／仮面ライダー2号）

## 第一話、「ステーキ」3

売れるわけねえか……

それを元に商売をするならともかく、個人の所有するスキルそのものが売り物になる訳がない。

初期スキルとはキャラメイク時に一つだけ追加される種類のスキルだ。大抵はよく言われる使えないゴミスキルだったり、初心者補助用レベル制限付きスキルだったりするのだが、木島のキャラクタ―についての物は少し、いやかなり話が違った。

超絶レアスキル、て言われてもなあ。

初期スキル：正義。発生確率一億分の一、聞けば体力減少で効果を発揮するガッツ系スキルの最上位らしいが、金第一でHPをほとんど危険に晒したことがない、死んだ経験さえ無い木島にはほとんどありがたみがわからない。

対人戦、PKやPKKには垂涎らしいが、人と戦うどころか、先刻のユッキー氏に依頼してヒーローアクションの殺陣<sup>だて</sup>を楽しむぐら이다。

……そろそろいくかあ。

金にならない物を眺めても仕方ない。

木島はイベント会場へ向かうため、パーソナルイベントスペースを出た。



キラつく陽光、吸い込まれるような深青の海。夏の孤島を正確に電子情報背景で模した会場には、約数千人のプレイヤー達がひしめいていた。仮想現実空間とはいえ、やはり人ごみは嫌いだ。

やっぱり人が多いなあ、回線大丈夫かな？

量子コンピュータの実用化により、回線の混雑による反応の遅延はもはや過去の遺物と化したが、それでも無駄な心配をする。

会場に並ぶは様々なヒーローに悪役の怪人など多種多様なデザインのプレイヤーキャラクター達。

イベント内容はそのものズバリ「武道会」、つまるところ最強の個人プレイヤーを決めるというものだ。

しかしその程度ではここまでプレイヤー達を引きつけることは出来ない。実は優勝賞金が掛かっている。

一位から三位までリアルマネーで合計三百五十万円。告知は半年から行われ、大いにゲームを活気づけた。その結果、ゲーム内には賞金目当ての「特撮ファン」ではないプレイヤーも増える結果となったわけだが。

まあ、俺も賞金に引きつけられたうちの一人なんだけどね。

あわよくば、とは思う。どうせ無理だろうが物は試しというやつだ。運良く勝てればめっけものである。

「やあ、木島くん！ やっぱり来てたのか」

快活な中年の声に顔を上げる。音声は不特定多数から受ける公共回線ではなく、登録ユーザーのみが交信出来る登録回線から響く。

木島は登録回線から挨拶を返した。

「ああ、安田さん。お久しぶりです！」

服装はジーンズにTシャツなど木島とほぼ変わらない。だが顔は茶色の紙袋を逆さに被り、両眼の辺りに穴を開けた格好というなかなかの異彩。両手には往年のヒーローの条件、指ぬきグローブが嵌められている。

この中年の声の男は安田幸久、ヤスタコキヒサユーザー名はジョウ。

ゲームを通して知り合い、木島には唯一互いの本名を教えあつた付き合いの長いプレイヤーである。木島にとって師匠兼友人といったところか。

「いやあ、なんだかんだいっても、やっぱりこういうイベントは盛り上がるねえ。条件はなんだが怪しかったけれど」

「そうっすね。お祭りはみんな好きなんですよ。……条件が『特に無し、個人で出来るなら何でもアリ』は正直どうかと思いましたがけど」

突如鳴りだすファンファーレ。無駄に荘厳なフルートやドラムが唄う。

「……なんスか、こりゃ？」

「イベントのオープニング、開会式ってところじゃないか、木島くん？」

孤島中心に造られた簡素な演説台に、人影が一人、降り立つ。スラリとした瘦身に、まとわれるは純白の背広、純白の手袋、純白の靴。胸元には名札。金色のステッキを携え、十の指には色取り

取りの豪華な指輪が幾つも嵌められている。

そしてその頭部は、黒光りする卵のデザインの仮面に覆われていた。

覗き穴さえ開いていない顔で呆然とする周囲を睥睨しながら、静かに右手を上げ、ざわめきを制する。優雅かつ気品に溢れた動作だ。

あの名札の文字、  
「Nyarlathotep」……？  
ナル、ニャラ？　なんて読むんだ？

イベントの主催がGMである以上、仕切りは経営会社のGMがやると思っていたのだが、あんな外装の会社の人間は見たことが無い。

「あー、どーもどーもみなさん、本日はお集まり頂きありがとうございます……」

和やかに、黒卵の男は挨拶を告げた。

これが、地獄を開く合図だった。

第一話「ステーキ」4（前書き）

「戦いはいい……　ゾクゾクする！」

（仮面ライダー龍騎より／仮面ライダー王蛇）

## 第一話、「ステーキ」4

積み重なる瓦礫、敷き詰めるように広がる荒れた砂利。

曇天の空は、ただ荒涼としたその場所を覆うだけだ。

特撮に置ける伝統のバトルフィールド 採掘場。

その岩山で、一大のバイクが停止。黒を基調としたカラー、デザイン的にはヤマハ系ロードバイクに近い。

そして、そのすぐそばにはバイクの持ち主、木島が幽鬼のような表情で、立ち尽くしていた。

なん、だよ。なんなんだよ、あれ……

つい一時間ほど前、イベント会場の孤島で見た、この世ならざる事態を反芻する。

それは、黒卵の男から始まった。

「さて、お集まり頂いて非常に申し訳ないのですが、ルールと賞金の変更がございます」

広がるざわめきをよそに、黒卵の男は淡々と喋る。

「現在エントリーは二千五百二十三人。会場の約半数ほどですね。ですがこれからエントリーして頂くのは現在ログインしている全てのプレイヤー、約八千人です」

はっ？

言葉の意味がわからない。見物目的の人間どころか、ログインしているだけの人間さえ強制参加させるという。そんな権限が運営会社にあるというのか。

怒号とざわめきが湧くが黒卵の男がゆっくりと手を振ると、ピタリと声がやむ。GM権限による強制消音機能だ。

「お静かに、願います」

男の声は丁寧な口調の青年の声だった。しかし、それには一片の感情はおろか、残滓さえ見えない。

「基本的なルールはいたって変わらず、『個人として出来ることはなんでもアリ』で行います。

賞金は順位形式ではなく、最後に残った十人にそれぞれ一人一億円を提供しましょう」

観客の顔がさらに驚きに染まる。もはや小遣いどころではなく、一財産だ。

確かめるようにその表情を眺めながら、男は言葉を続ける。

「どうやら喜んで頂いたようですね、良かったです。

選定方法はより単純に、『参加者の中で最後に生き残った十人』で行います。

その十人が定まるまで、このイベントは終わらず、終われません。

……ああ、これは大したことではないのですが、一応言っておくと」

こともなげに、男は告げた。

「終了するまでログアウトは一切できません。外部との交信も一切不可です。

そして、『HPゼロ』、死亡した場合、現実でも死ぬことになりま  
す」

淡々と、当たり前のように喋り続ける。

理解出来ない事態にある者は叫びだし、ある者は呆然とし、ある者は理不尽に憤慨する。様々な不快の感情を露わにする無音の群集に、男はなんの感情も湧いていないようだった。

「そんなものに興味は無い」はつきりとその意志が見える。

「もちろん、死ぬと言われて信じる人はいないと思いますので、サンプルを用意しました。

みなさん、彼は真実を伝える貴重なメッセンジャーです。どうか彼の犠牲を無駄にせず、現実を受け止めてください」

男の真上、上空に映像が浮かぶ。

画面は二面にわけられていた。映されるはゲームのプレイヤーキャラクターと、ゴーグルやヘルメット、グローブなどのインターフェイス機器に接続され、椅子に縛りつけられた中年の男。

あれは……

木島にはキャラクターに見覚えがあった。戦隊ヒーローにでてきそうないわゆる「博士」役の老人。GMの使う広報用キャラクターだ。

「彼は私の前代のGMです。名前は……どうでもいいですね？  
まあ、変わったのはつい最近なんです……  
そして、キャラクターが死ぬとこうなります」

言葉と同時に、画面外から触手が伸びる。幾筋もの触手は槍のよ

うにキャラクターの体を串刺しにしていく。本来ならばGMのキャラクターは制限以上のレベルなはずだが、瞬く間にダメージを受けキャラクターはロスト、消えた。

同時に左画面、縛りつけられた前代GMの頭が一瞬発光。電流の輝きと共に、全身が激しく痙攣、床に椅子ごと倒れる。ブスブス煙が上がるのが見えた。

倒れた際に外れたゴーグル。犠牲者の顔が覗く。

焼け焦げた皮膚、煙を上げる髪。白濁化し、破裂した眼球からは内容物が零れる。

高電圧による、感電死だ。

死、んだ……死んだのかよ……これ？

理解出来ない。人が死ぬ所など生まれて初めて見た。

しかもこんなわけのわからないことで人が死ぬ所など。

混乱が脳を突き刺す。周囲の人間も同じく声を出そうとさえない。この内の何割が、今日の前の事態を正確に理解しているのか。

だが、その混乱を沈めさせる現象が発生する。

「  
ツ　ツ　ツ　ツ　ツ　　ツツツツッ！！」

黒卵の男は嗤っていた。声を上げ、背中を曲げ、愉悦と快楽を撒き散らして哄笑を上げる。

だがその笑い声を木島は理解出来ない。いや、この場にいる人間全てが理解出来ない、理解したくないおぞましい哄笑だった。本能が、頭脳が、魂が、およそ人が人であるための全てが理解を拒絶するおぞましいほどの暗黒を内包する快楽の声。

その場にいた全ての混乱を、吹き飛ばし、破壊し、蹂躪する狂気と恐怖だった。きっと人が死ぬ様だけがあの黒卵の男の感情を動かすのだろう。



……ひ、いッ

体を翻す、もうこの場にはいられないと木島は思う。恐怖にかられたまま、木島は孤島から一心不乱に逃げ出していた。

第一話「ステーキ」5（前書き）

「人間は皆ライダーなんだよ!!」

（仮面ライダー龍騎より／仮面ライダーベルデ）

## 第一話、「ステーキ」5

「チクシヨウ、なんなんだよ、あれは……」

思い出すだけで足すくむ。それほどに、あのおぞましい哄笑が耳から離れない。

逃げ出す途中で黒卵がさらに変更点を説明していたが、逃げ出すのに夢中であまりはつきり覚えていない。臃げに覚えているのは、「レベル制限の解放」「怪人の経験値を増やし、低レベルでも上げやすくする」程度だ。ほかに色々変わっているかもしれない。

「もうどうすりやいいんだよ……これ……」

宣告通りに、ログアウトは出来ない、新しいログインの痕跡もない。外部とはメールも電話も通じなかった。

先程、無差別放送で「試しに死んでみる」という勇氣あるプレイヤーの呼びかけがあり、事実死亡したようだが、二十分経過しても復活した報告はない。

わけわかんねえよ……

十年ほど前に流行ったVRから出られなくなるいわゆる「デスクーム物」小説そのままな内容だが、まさか現実として出くわすとはインターフェース機器にあのように人体を焼く機能があるのかはわからないが、試す気はわからない。それ以前にこれからどうすればいいのかさえわからない。

ここから出るためには、最後の十人にならなきゃいけない……  
そのためには……殺さなきゃいけないのか？

無論、そんなものはあの黒卵の男の誘導しようとするルートではない。あの男が招く方向へいく時点で既に負けだ。

だが、折れそうな心には提示されたルートを拒絶できる力が足りない。

時間、時間が経てば……外部から助けが……

あるいは、確証の無いなにかにすぎるか。

助けなんか、くるのか……？

木島がゲームをし続けるのは逃避が理由だ。スーツアクターの夢を諦めた時から、ずっと逃げ続けている。半身不随になった同期、白沢とは会ってさえいない、会うことがどうしてもできなかった。

これが、俺に相応しい報いなのか……？

これが、諦めて逃げた自分に相応しい終わり方だろうか。

「木島くん、ここにいたのか」

後ろからの声に、飛び退きながら振り向く。そこには、見慣れた紙袋がいた。

「や、安田さん……」

正直、他の誰かに合うのさえ怖くて仕方ない。採掘場で一体一と

いう状況がさらに足をすくませる。

「……木島くん、怯えているのか？ 大丈夫だ、私は敵になる気はない」

両手を広げ、害意がないことを見せようとする。

「あの卵男の所から逃げ出す君を見てね、心配したんだよ。あれは……なんとか理解しがたい存在だったね」

安田の心にも、あの恐怖が刻まれていた。

「もうわけわかんないっすよ。俺たちはどうすりゃいいんですか……？」

「あの男が言うには戦うしかないだろうな……だがそれ以外の道も必ずあるはずだ。『そうしなければいけない』そう考えた時点でヤツらの思うツボになる。幸い明確な期限はまだ無い。僕たちの生身のほうがどのくらいもつかはわからないが、いまはとにかく落ち着かないといけないよ」

安田の思考は木島より遥かに冷静だった。普段のレンジャー物にはしゃぐ中年の面影は無い。

「そうっすね……大人しくアイツのいうこと聞いてちゃだめだ。

安田さん、たしか奥さんと娘さんいるんですよね？ だったらなおさらリアルに帰らないと……」

安田の家族については、日頃の雑談から聞いていた。たまに酒を飲んで話すと、いつも娘がかわいいとしか言わなくなる。安田はそ

んな男だった。

「最近妻にはよく怒られるし、中学生になった娘は冷たくなってきたけど、帰らないわけにはいかないからね」

笑いながら安田がおどける。この非日常の中で、それでもなお日常に帰還するために男達は決意を固める。

「とにかく、今は組める人間を探し……ん？」

安田の言葉が止まる。視線は木島の後ろ、遙か向こうへ。

「……木島くん、伏せて。それから後ろを見るんだ……襲われてるぞ」

「……え？ 誰がですか？」

安田が伏せる。木島も言うとおりに伏せて後ろを観察。『遠見』のスキルで見ると、後方五百メートルに複数の人影が見えた。

ライダーやレンジャー、怪人など格好がバラバラなプレイヤーが四人、必死な形相で走っている。ステータスを見るとレベルは全員十代、初心者だ。

あれは……

そして、後ろから追いつけるバイク二台。ライダーのプレイヤーが二人、銃を撃ちながら初心者達を追い詰めていた。その様は、まさに狩りだ。

「や、安田さん、アイツら何をやって……」

「おそらくは、人減らしのための狩りだ……少しでもいまの内にライバルを減らす気なんだろう」

ステータスを確認するとライダー二人のレベルは145と148、カンスト間際まで上げてある。ひよっとしたらイベントの賞金狙いのプレイヤーだったのか。

「人減らしって、人が死ぬかもしれないんですよ！　なんでそんなことを……」

「うまく生き残れば一億が手に入るからだろう。もっともそれがちやんと用意されるかなんてわかったものじゃないが。」

実際に死んだんじゃない、単純にログアウトになっただけかもしれない、そういう可能性もある。

……そうやって、あんな風に暴走するプレイヤーを出す。確実な証拠を小出しにしながら、プレイヤー間の混乱や疑心暗鬼をさそうのが、あの卵男の目的か……？」

真実も、真意も、目的も、全てはまだ果てしない闇の中だ。見極めるためには、今を生き抜かねばならない。

「……木島くん、今から私はあの初心者を助けにいくと思う。君は……行くかね？」

安田の声は冷たく、神妙だ。普段の気の抜けた面影は無い。

「お、俺は……」

とっさに応えられない。実際に負けたら死ぬかもしれないという

プレッシャー、対人戦の経験の無さ、重責がきつく喉を締め付ける。

「木島くん、私は子供の頃からテレビのヒーローが好きでね。だからこのゲームを始めたんだ。」

『VRの世界で派手なごっこ遊びが出来る』それが始めた理由だった」

それは木島も同じだ。だが少し前までは、安田は趣味として、木島は逃げるための手段としてゲームをしている。そして、この今の瞬間は生き伸びる手段として。



第一話、「ステーキ」6（前書き）

「じいやが言っていた。

『男は燃える物、火薬に火をつけなければ花火は上がらない』」

（仮面ライダーカブトより／神代 剣）

## 第一話、「ステーキ」6

「誰だっと思うことだろうけれど、一度でいいからヒーローになってみたかったよ。今じゃただの公務員だけだね。」

きつとこのゲームを好きでやっている人達は、そんな人ばかりなんだと思うよ。本物のヒーローにはけしてなれないと知っているから、偽物のヒーローを楽しめるし、楽しもうとしてるんだ」

木島は言葉を返せない。安田の言葉は、本質をついていた。

ヴァーチャルリアリティという嘘の世界だからこそ、ヒーローという嘘は生きられる。

「でもね、この年になって恥ずかしながらやっと気づいたんだ。ヒーローの条件はヒーローとしての能力をもっていることじゃないって、そんなものは二の次だって」

安田が立ち上がった。歩きだし、木島の前に出る。

「安田さん……」

「どんな状態でも、どんな時でも、どんな相手でも、どんな結果でも、理不尽にたいしてヒーローの行動を取る。きつとそれがヒーローの条件なんだよ、木島くん。偽物が、本物になれる時がきたんだ」

安田は振り向かない。ただ、向こう側の狩られようとする弱者を見つめていた。

「木島くん、もし、私が負けたら……どんな手を使っていい、この

ゲームから必ず生き延びてくれ。

そして、娘に『最後まで父親の責務を果たせなくて済まなかった』と伝えてくれないか」

「安田さん、そんな、待ってくれよ！ 安田さん！」

木島の声は届かない。安田はその広い背中を木島から遠ざけるように、二人のプレイヤーの元へ歩いていく。

安田のレベルは130、高い部類だが、二体一では余りに不利だ。それでも、安田の歩みに迷いは無かった。雄々しく、進んでいく。安田の姿が小さくなるたびに、木島の葛藤が強まる。「このままではいけない」魂が囁く、だが足が動かない。

「う、ああ、ああああ……ッッ」

呻きながら砂利の地面を叩く。幾度も拳を叩きつけ、ダメージの発生により傷つき、血が吹き出すエフェクトが発生。

「……チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨウ！ チクシヨウオオッ！」

それでも痛みはない。痛覚がないこの世界では、痛みを感じることが出来ないからだ。

この偽りの世界で己を起爆させるためには、肉体の痛みではなく魂だけを使わなければならない。偽りではない、強く奮い立つ心がある。

逃げ続ける自分を、立ち上がれない足を、恐怖に絡みつかれた体を、そして、目を背け続けたヒーローになりたいという夢を今こそ奮い立たさねばならない。

このまま、何もせず安田を見送れば、一生後悔して生きていくし

かない。それだけは死んでもごめんだ。

「オ、オオオオオオオッ！」

荒野に絶叫を響かせながら、木島を震える足で立ち上がった。

恐怖を超えて、ヒーローとなるために。もう一度、夢を掴むために。そして、二度と後悔をしないために。

第一話、「ステーキ」7（前書き）

「なあ……信じてみねえか

たとえ神も仏もいなかったとしても……………

仮面ライダーはいる……ってな」

（仮面ライダースピリッツより／滝 和也）

## 第一話、「ステーキ」7

痛みが無い楽しむことだけが目的の世界でも、恐怖が存在することとを彼らその時知った。

息を切らせ、採石場を走る四人の人影。前方を走る一人、怪人が半泣きの表情で後ろを振り返る。

一体なぜこのような事態になったのか、ただ初めたばかりのネットゲのイベントを、初心者仲間と観戦しようとしていただけなのに。

な、なんでこうなっただんだよ……ッ！

怪人の外装を持つ逃亡者には、今の状況がよく理解できない。わかってしていることは、死亡すれば本当に死ぬ可能性がある事、そして、

なんでアイツら追いかけてくるんだ！？

確実に自分達を殺そうとするプレイヤーがいる事実、しかもかなりの高レベルの。

追跡者の一人、黄色のゴツい外装のライダーが腰元に手を伸ばす。ゆっくりと抜き出された拳銃が、逃亡者達へ銃口を向けた。

「ヒ、ヒィ、」

恐怖の悲鳴より速く、背後からの光の弾丸が飛来、怪人の頭部に一つ、胸部に二つ着弾。爆ぜる。

音も無く、犠牲者が倒れて転がる。後ろを走っていた仲間の初心者者が駆け寄るが、抱き起こすより早く、その姿が分解、ロスト。

無慈悲なまでの、弱者の死に様だ。

足を止めた三人に、強者二人が距離を置いてバイクを停車。ゆっくりと、降りる。

青い外装のライダーは、気だるげに三人を眺める。細いシルエツトは白昼の幽鬼を想起させた。

拳銃を二丁とも抜き放ち、黄色い外装のライダーが構える。がっしりとした体型は、人型の岩にも見えた。

言葉は無く、呵責も無い。<sup>かしゃく</sup>ただ退屈な作業の様に、引き金に指をかけた。

「……ッッ！」

必死で頭など急所判定のある頭部をかばう三人。だがこのステータス差でどれほどの効果があるか。

乾いた発砲音が岩の荒野を走る、しかしそれは正面ではなく、真横からだ。

撃ち込まれた光弾の位置は、弱者の額ではなく、強者の足元へ。

「やめなさい！ 君達の行動は殺人に繋がる可能性がある、今すぐそのグループから離れるんだ！」

岩山に、赤い男が立っていた。

無差別回線、最大音量の声でライダー二人へ呼び掛けている。

灼熱の紅に巻かれる白のライン。流線型を主線としたデザインのヘルメット。ゴーグルは黒。

右手に抜かれるは、メカニカルかつ子供に受けそうな形の拳銃。レンジャー物に置ける、「レッド」の男が追跡者と対峙する。

……助け、なの？

混沌の状況の中、それが真の救済なのか。弱者達にそれを正確に判断できる材料はない。

ただ運命に流されるだけだ。

二人組の内、蒼いライダーが岩山より下りる安田を見上げる。しかしもう片方、黄色のライダーは特に意に介さず、拳銃を初心者達に向けたままだ。

「おい、聞いているのかっ！」

更に叫ぶレッド「安田、だが銃口が即座に彼へ向く。

「チッ！」

発砲音、光弾がレッドの足元へ着弾。石を碎き煙を上げる。

「……警告だ、邪魔すんなオッサン。そのレベルと二体一でまともにヤれると思ってるのか？」

精一杯ドスを効かせているが、まだ若い青年の声だ。やはり高いレベルのプレイヤーとの戦闘はリスクのほうに気がかかるらしい。青のライダーは変わらず、立ったままレッドを凝視。喋りさえしない。

「死ぬ可能性があるんだぞ！ バカな事を言っでないで……」

「これがただのイベントで、死んでない可能性だってあるだろうが！ 生き延びたら一億だぞ、引くわけねえだろアホか！」

仮に死ぬ事が嘘であってなら、一億の賞金も嘘である可能性が高い。たがイエローのプレイヤーは最も自分に取って都合がいい可能



性を取った。

死ぬ事は嘘で賞金は真実。そう思うことで殺人をPKとして肯定し、賞金を取るための「これは殺人では無い」という免罪符に変えたのだ。

「わからない以上、無闇にPKをしてはならない！ あの卵男エッグマンの思うツボ……」

イエローの脳内で、あの理解を拒絶する嗤い声がフラッシュバツク、恐怖を呼び戻した。

「うつるせえッ！ ヤツの事は言うなァッ！」

飛来する無数の弾丸。とっさに防御体勢を取るレッド。だが、前方に飛び込んだ黒が、弾丸を全て受け止めた。

「……木島くんっ！？」

黒のライダー、ステーキの両腕装甲から煙が上がる。やはりレベル差は厳しい、弾丸は強力だ。だがステーキは戦闘体勢のまま、一歩も退かずレッドの隣に立つ。

「……おかしいッスよ、こんなおかしいじゃないですか、安田さん」

前方に敵を捉えたまま、ステーキが呟く。かすかに、足が震えていた。

「……レンジャーのくせに、赤一人だけなんて、そんなおかしいですよ。だから」

それでも、戦うと決意した。逃げないと決めた。後悔はしたくない、だから、今は、

「しょうがないから、今日は俺がブラックやりますよ、安田さん？」

「……君は本当に、付き合がいい男だな、木島くん。  
私はいいい相棒を持ったよ」

二人と対峙する青と黄。周囲を濃厚な闘争の空気が漂う。  
間違はなく、殺し合いが始まる。残酷なほどに正義も悪も無い、  
生存のための闘いが待っている。  
避ける術は無い。ぶつかなければ生き残れない。

「木島くん、君はレベルの低い青の方を相手してくれ。私は黄色を抑える。初心者達が逃げればそれでいい、無理はするなよ？」

「はい、わかりました安田さん！」

「……木島くん、一ついいかな」

冷たく、声を絞る安田。声にやや怒気が含まれている。

「いいかいっ！ この姿勢は、安田<sup>レンジャー</sup>じゃなくて『レッド』と呼んでくれッ！ とても大事なことだ、わかったね！」

「え？、あ、はい、わかりました……レッドさん」

反応に困りながら返事をする木島。安田は明らかに本気だ。  
ともあれ、戦いの幕は切って落とされた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2106z/>

---

フェイクヒーローズ・オンライン

2011年12月16日19時51分発行